WEB版
菊陽町図書館
少女雑誌の部屋だより

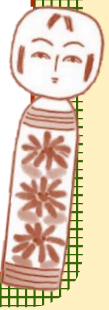
わすれなぐさ

VOL.21／2021.12

企画展
「乙女のふろく大集合!!」展
2021 11/3 → 2022 2/28

少女雑誌の部屋から

今年はいつもにもまして一年があっという間に過ぎ去った気がいたします。皆さまはいかがでしたでしょうか？私たちを振り回し続けていたウィルスもようやく力を弱めつつあり、これからまた少しずつ元のような生活が戻ってくるのではないかと期待しています。とはいえ、コロナ禍で見えてきた課題も多く、よりよい社会にするために自分たちはどう行動すればよいのか、本気で考える時期にきているように感じます。あらたな年が輝かしい未来へとつながるものでありますように。



雑誌紹介21

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

りぼん（集英社）

昭和30(1955)年9月号～
現在は少女漫画雑誌として刊行中

『少女ブック』の妹雑誌として創刊された。当初は少女雑誌ではなく「幼女ブック りぼん」としてスタート。少しずつ対象年齢を引き上げていき、昭和38（1963）年の『少女ブック』廃刊に備えた。勝山ひろしや江川みさおの挿絵による小説や絵物語が人気だったほか、グラビア・おしゃれについての読み物・少女漫画などを掲載していたが、昭和33（1958）年頃からは徐々に漫画の占める割合が増え、少女漫画雑誌へと移行していった。昭和35（1960）年には牧美也子の『マキの口笛』が大人気となり、主人公にファンクラブができるほどのブームが起きた。昭和40年代以降は一条ゆかり、陸奥A子、田渕由美子など、次世代の漫画家たちが活躍。創刊号から欠かさず付いているふろくは人気のひとつとなっている。平成27（2015）年8月には創刊60周年を迎えた。

少女雑誌を彩った挿絵画家たち21

池田かずお（いけだ かずお）　1925―？

中国大連生まれ。独学で絵の道にはいる。
昭和23（1948）年に少年雑誌『冒険活劇文庫』（後の『少年画報』）で少年ものの挿絵を描く画家としてデビューした。翌年、昭和24（1949）年7月に創刊した『少女ロマンス』ではメイン画家を務め、表紙のほか口絵、挿絵などを担当した。
その他、『女学生の友』、『少女の友』、『ひまわり』、『少女クラブ』など多くの少女雑誌の挿絵を描いて活躍した。
池田かずお、深草みどり、池田和夫などの名を経て、昭和40年前後から単行本の挿絵や口絵を執筆する際には池田浩彰を使用するようになった。
「少年少女世界の文学」などの挿絵を数多く手掛け、今なお多くのファンを魅了している。

少女雑誌の豆知識

～別冊ふろく～

1950年代後半に入ると、輸送面での問題もあって、ふろくの細かい材質規制が強まりました。「ふろくは紙製品でなければならない」との要請を受けて考え出された策のひとつが、折しも人気の高まりつつあった漫画を別冊ふろくとしてつけるというアイディアでした。本誌に掲載された漫画の続きを別冊に仕立てたものが多く、本誌のほうには「つづきは別冊を読んでね」などと書かれており、少女たちを夢中にさせました。これが漫画全盛の時代への出発点になったと言えるのかもしれません。